東と西にある精神的な伝統の間に和合をもたらすには

アンジャム・カシード

バハイの偉大な目的の一つは、すべての宗教の人々を友情と親睦の精神で一つにすることです。

> このようにして神の承認と権威の昼の星は世界の主、神の命令の地平線上に輝きでた。
>
> (バハオラの書簡 p22)

バハイ信教の守護者は、われわれの目的と目標を尊敬をこめて他の宗教に大変明らかにしておられます。

> バハオラが源であり、中心であるこの啓示は、前にあった宗教のどれをも廃止することはない。またほんの少しでもそれらの特色をゆがめたり、その価値を小さくするつもりはない。それは過去のいずれの預言者たちを小さく見せるような意図を否定しているし、またそれらの教えの永遠の真理をすこしずつ削ることでもない。それは決してかれらの主張の中に生き生きと活気づいている精神と矛盾しないし、それらの大業に誓いをたてた人の基礎を崩すことを探しているのでもない。その本来の目的はこれらの信教のすべての支持者たちに、かれらが自分のものと思い、一体感をもっている自分の宗教への理解をさらに増すことが出来るようにするためである。そしてその目的をもっとはっきり理解することができるようにするためである。その真理の提示の仕方は折衷主義ではなく、その主張を断言するにあたっては傲慢ではない。その教えは、宗教的真理は絶対的なものではなく相対的なものであるということ、神の啓示は累進的であり、最終的なものではないという基本的な原則を中心としているのである。明瞭に、大胆なやり方で、すべての確立された宗教は起源において神からあたえられたものであり、その目的において同一であり、その働きは補完しあい、その目的においては、継続的であり、人類にとりその価値は欠くべからざるものであると主張している。
>
> (バハオラの世界秩序 p.57, 58)

この引用文はバハイ信教もふくめて、すべての宗教は同一の目的を持ちその機能は補い合っていて、人類にとって必要不可欠の価値を持っているばかりでなく、バハイ信教はその他の信教のだれでもが、自分のものとして共感している宗教をもっとより良く十分に理解できるようにと助けなければならないし、その目的を明確に理解するよう助けなければならなりません。このことは、バハイは、他の宗教のメンバーと、競争したり、精神的に改宗させることを競い

合うことでもないということです。またいずれの人もその誓いをたてている彼または彼女の精神的な伝統の基礎を掘りくずすことを求めているのでもありません。バハイ信教と他の宗教の関係、そして累進的啓示の性質はショーギ　エフェンデイの他の文章でもっと良く説明されています。ここでは他の宗教がより劣った地位へとひきさげられる危険性に、明白に光をあてています。そしてすべての宗教にとり、バハイ信教の基本となっている和合は、一つの宗教の進化したものとして述べられています。

> バハイの啓示は予言的サイクルの頂点を示すものとして主張しているし、すべての時代の約束が成就されるともいっているが、どのような状況にあっても、前にある宗教の生き生きとした、そしてその基礎になっている、最初の、そして永遠に続く原則を無効にするつもりはない。神が与えられた権威はそれらのおのおのに確立されているが、それは認められているし、もっとも確固として最終的な基礎として確立されている。それは永遠の歴史においての違った舞台であり、一つの宗教が絶えず進化しているもの以外には何らの光もあてられていない。神聖にして分けられないもの、それ自身が一つの統合されたものをかたちづくる。
>
> 世界の宗教の精神的基礎を投げ捨てることを目的にするなどとはとんでもないことであり、その公然と認めている不変の目的はその基礎を広げ、その原理を再び述べ、それらの目的と折り合い、その生命を再び活気のあるものとし、その唯一性を表示し、それらの教えが持つ本来の純粋さを回復させ、それらの働きを調整し、それらのもっとも高い理想を実現させることを助けるのである。これらの神により啓示された宗教は（もっとも近いところで観察している人が絵のような表現をつかっているが）死すべき運命にあるが、再び生まれ出てくるのである。
>
> （バハオラの世界秩序 p.114-117）

バハイの方法はすべての宗教の背後にある和合を強調しています。バハイは他の宗教と競争することはできません。何故なら、自身を含めてすべての宗教を信じているし、一つの宗教の進化した一部分と信じているからです。その目的は各信教の原理を再び述べることであり、それらの目的と折り合いをつけ、それらの生命を再び活気のあるものとし、その唯一性を示し、それらの教えがもっている本来の純粋さを回復させ、それらの高遠な理想の実現を助けるのです。バハイが直面している仕事は他の宗教の再生を実現させることで、それらにとって代わることではありません。この点は強調しすぎるということはありません。はっきりと宗教の和合を確立することはバハイと他の宗教の人たちが一緒になって働くことを含んでいるでしょう。これは各宗教が人類の精神的未来においてそれぞれ果たす役割があるということです。

私が東と西の精神的伝統の和合についてお話するのは、この精神についてなのです。西欧の伝統では、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教を形作っている一連のセム族系の宗教について述べているのです。東の伝統とはヒンズー教や仏教のような宗教について述べています。さて、宗教の学者たちがこれらの伝統間につけている共通の区別があります。かれらは西欧の精神的な伝統を二元論とし、普通一元論とされる東の伝統とは対照的であります。二元論と一元論とはなんでしょうか。それらの一般的な解釈は人と、神と人の人生の目的を包含していますが、私はここで特に人間の性質の関係に焦点を当てたいと思います。

西欧の二元論についていくつかの例をあげさせてください。キリスト教では、ひとは典型的に、半分は動物で、半分天使であるとされます。使徒パウロは、人間の本質の中で葛藤するものとしてこのことを述べています。しかし、私の体の中で違った法則が働いているのがわかります。

私の心の法則に対して戦いを挑み

（ロマ書7章22-23節）

パウロは同じ手紙の中で人間の本質は、本質的に「罪」（ロマ書7章18?20節）に結び付けられている、と言っています。人間についてのこの種の記述は、善と悪（罪深い）自己としてキリスト教徒の間で何世代も受け継がれてきました、イスラム教やユダヤ教でも同じような状況が存在します。かれらは人間の善の部分を「神のイメージに似せて作られた」とし（創世記1章26節）一方、罪深い自己は肉体に結び付けて考えました。他方東の一元論は、この二元論を克服することに集中してます。例えばヒンズー教の伝統を持つウパニシャッドからの次の引用をとりあげてみましょう。

二元論らしさがあるところでは人はもう片方の匂いを嗅ぎ、もう片方を見るのか、もう一方を聞き、もう一人と話し、もう一方について考え、もう一人を理解する。しかし、すべて自分自身であるなら、それではだれの匂いを嗅ぎ、だれを見、だれのことを聞き、だれと話し、だれのことを考え、だれを理解し、何をもってこの全宇宙を理解する存在を理解するべきなのか。まったく人は理解する人を理解するべきなのか。

（ウパニシャッド2：4：12-14）

さてこの種類の引用文は多くの混乱をおこさせます。多くのヒンズー教徒はこれらのタイプの文章にもとづいて人生のゴールは神と同一のものとなること、すなわち、私たち自身の自己は消えうせて、私たちは“本質的なもの”と一体化するまでと主張します。このことは人は神の反映であり、神と人は本来大変違っていると教えているセム族系の宗教と合い入れないように思われます。仏教では、人生のゴールは二元論を超えるものとして述べられています。実際に仏教の主な教義の一つは“自己”の存在を否定していることです。たとえば、ブッダの言葉に、

自己の存在は幻想である。この世界には自己の確信から流れ出るものを除いては、間違ったこともないし、悪徳や悪はないのである。

（ブッダの教え）

この種の引用文は、人間には個としての自己はないし、個人の魂はないと仏教徒の間に広く行き渡っている信念へと導きます。それはまたセム族系の宗教の教えと衝突をおこします、私たちの仕事は宗教を和合させることですから、私たちにとりバハイ信教は一元論だろうか、二元論だろうかと問うのは自然なことであります。これにたいする答えはたいへん興味のあるものです、これはバハイの教えをもっと深く理解するのに役立つばかりでなく、バハイの教えが

東と西の精神的伝統を和合させる橋を架けることを可能にする方法を私たちに考えさせます。バハイの教典を探索するにつれて、人間の特質についての一元論的なものと、二元論的なものの両方があるように思えるのです。次のアブドルバハの引用文を見てみましょう。

> 人間は最高の物質段階にあり精神性の始まりにあります。—即ち、人間は不完全さの終わりにあり、完全さの始まりにあるのです。人間は暗黒の最後の段階にあり、光明の始まりにあります。それゆえ人間の状態は、夜の終わりであり、昼の始まりであると言われているのです。人間は天使のような面を持つと同時に、動物的な面を持っています。存在の世界のどの種をみても、人間の種ほどにそうした相違、対照、矛盾、対立があるものはありません。
>
> (『質疑応答集』pp.258-259)

ここで動物的自己は、精神的自己に反対するものとして述べられています。他方七つの谷ではバハオラは自己が消滅した精神状態の頂点において、神を探求することについて述べています。

> まさに、愛に燃える者の心臓から皮膚にいたるすべてのものは、この火炎に焼き払われ、友なる御方以外に何も残されないのである。
>
> (『七つの谷』p.33)

さてこの明らかな矛盾は人間の特質は、三つの面を持つといったはっきりした状態を述べている別の引用文によって解決することが出来ます。

> 人間の世界はその性質によって三つの段階にわけられる。つまり肉体、霊魂、それに精神の段階である。肉体というものは、人間の物質的な、あるいは動物な段階をいう。肉体の立場から言えば、人間というものは、動物界に属している。人間の肉体も動物の肉体もそれぞれ構成する諸要素が互いに引き寄せあう法則に支配されて一つの形を保持している点で相通ずるのである。動物と同様、人間には五感の能力が備わり、暑さ、寒さ、空腹、渇きなどの感覚に支配されるのであるが、動物と違うところは、人間には理性ある霊魂、つまり、人間の英知が宿っていることである。この人間の英知というものは、肉体と霊魂とを媒介するものである。人間がその心を通して霊魂に自分の理解力の目を開かせるようになると、そのときかれはあらゆる被造物を包含する人間となる。人間はすでにこの世に現れたあらゆる被造物の総和であり、進化の過程を経てきたあらゆる被造物の優位を占めるものであって、すべての下位の世界をわがうちに包容するものであるからである。つまり、神霊が人間の霊魂に感応してその知性があかるく輝きわたるようになってはじめて人間が万物の霊長となるのである。
>
> (『パリでの講話』p.134)

この文章は人間の特質に関するバハイの考え方にある多くの側面をはっきりさせます。肉体

と魂の世界は結合され、第三の世界—精神の世界にその共通の起源をもちます。

神の世界はキリスト教徒のいう聖霊に似ています。精神の世界は共通の基盤を持ち、その上に人の肉体と心意が立っています。それは、明らかに二元論の背後に一元論があるということです。そして肉体と心意の間を結びつける輪があり、その助けを通して肉体と心意は調和を保つのです。この考え方を三元論とでも呼びましょうか。そこでは、二元論は一元論が土台になっていて意味を与えられ、和合しています。バハイの人間の特質についての三元論的取り扱いは、東の一元論と西の二元論の間の衝突を解決する方法となります。バハイの教典中にはっきりとは述べられてはいませんが、他の宗教にある二元論を支持し、和合をもたらす一元論に基礎をおく間違いのない証があります。キリスト教では、私たち個人と自己を結びつけるものは聖霊です。

> すなわち、ある人には御霊によって知恵の言、また他の人には同じ御霊によって信仰、またほかの人には、一つの御霊によって癒しの賜物、すべてこれらのものは、一つの同じ御霊の働きであって、御霊は思いのままに、それらを各自に分け与えられるのである。
>
> (コリント人への第一の手紙、12, 8-11)

ここで、罪深く、そして天使のようなキリスト教徒の特質は結合され、そして聖霊によって限界を超越します。ユダヤ教では、人間の特質と肉体的世界は直接神に依存しています。“神の息”が人間に命を与えます。神へこの息が戻っていくことは死となります。

> 主よ、あなたは多くのものを造られた。なんと賢きお方でしょうか。地上はあなたの造られたもので一杯です。大洋があります。大きくて、広く、そこには沢山の生物が住んでいます。それらのすべては、必要なときは食べ物を与えて下さるあなたに頼っています。あなたはかれらにそれを与えられます。そしてかれらはそれを食べます。あなたは食物を与えます。そしてかれらは満ち足りたものとなります。あなたが顔をそむけるとき、かれらは恐れます。あなたが息を取り除かれるとき、かれらは死にます。そして、かれらがやって来たところの塵へと帰っていきます。しかし、あなたがかれらに息を与えられると、かれらは創造されます。あなたはかれらにこの地上での新しい命を与えられます。
>
> (詩篇 1042：24-30)

物質の世界と人間の特質は神の息によって結びつけられます。上の旧約聖書の文から、神の息は人と、自然のあいだにある二元論を乗り越えているのがわかります。人間の特質の三元論的性格が暗示されています。コーランでは人間の魂は、また神の息の言葉で述べられています。

> 見よ、汝の主は天使に言われた。われは、人間を作ろうぞ。鳴り響く粘土から、土くれより形づくって。われはその割合に応じてそれを形作り、わが聖霊をかれに吹き込むとき、汝かれに敬意を表してひれ伏せ。
>
> (s15：28-29)

または

神はかれの心に信仰を書きこまれた。そして神ご自身の聖霊の力でかれらを強くされた。

(s50, 22)

神はいつでも人間の中に存在していられます。

われはかれの頚動脈より近いところにいる。

(s50：16)

この神の存在は物質の世界においてもまた明白なしるしとなるところまで広げられます。

われはまことに世界の中でそして汝ら自身の中にわがしるしを示そうぞ。

(s41：53)

それで物質世界と人間の特質との間の懸け橋となっているのは、神ご自身です。人の魂は聖霊と神の息によって満たされているので、イスラムにおいては、魂の性質は神から分離されることは出来ません。

仏教では二元論的記述があります。自己を克服しようとする挑戦は、たとえばブッダによれば、戦いをしているようになぞらえています。

もし人が自分自身を抑制することを他の人に教えるようにするならば、かれは他の人を服従させるかもしれない。人の自己というのはまったく服従させることが難しいものだ。もし、ある人びとが何千人もの人を戦いで何千回も征服したとする。そしてもう一人の人は彼自身を征服したとすると、この人こそはあらゆる征服者の中でも最も偉大なひとである。

(『ブッダの教え』より)

この文章はパウロが述べたのと同じです。他の場所でブッダは自己を否定しているけれどかれは心意の実相を述べています。

タハガタは自己はないと教えている。魂はかれの自己であり、そして自己はわれわれの考えを考えるものであり、われわれの行為を行うものであるというかれは、間違った教義を教えるものである。それは混乱と暗黒へと導く。一方タハガタは心意があると教えている。魂の心で理解する人は心意が存在すると言っている。その人は明確さと悟りへと導く真理を教える。

(『ブッダの教え』p.151)

仏教における人間の特質の三つの要素とは、肉体と心意と真理であります。真理またはタハガタはときどき言及されているようにセム族系の一連の宗教の聖霊に大変似た方法で記述されています。ヒンズー教のウパニシャッドでは、それはアートマンです。すなわち人の中にある神の聖霊です。それは人の肉体と魂を結びつける輪です。アートマンは、馬車の乗客にたとえられます。理性は馬車の御者です。そして馬は五感といわれる肉体の感覚です。

> 馬車の統治者であるアートマンを知れ。そして体は馬車自身である。心意はまことに馬の手綱である。馬は感覚であるという。そしてかれらの行く道は五感が感じる対象物である。魂が心意と一緒になるとき、五感は喜びと悲しみを感じる。正しく理解せず、その心意が決して落ち着かない人は、自分の人生の支配者にはなれず、暴れ馬を御する下手な乗り手のようなものである。しかし、正しく理解し、その心意が落ち着いている人は、自分の人生を支配している人である。かれはよく訓練された馬に乗る上手な乗り手である。正しく理解しない人は不注意なものであり、決して純粋ではない。そして旅の終わりに行きつくことはなく、死から死へとさまよう。しかし理解力を持ち、注意深く純粋なものは、旅の終わりに到達し、それから決して戻って来ない。
>
> （ウパニシャッド p. 60）

この巧みな比喩ははっきりと三元論によって解釈されます。身体は馬車です。一方理性は御者によって表されていますが、おおまかに言ってセム族系の宗教の魂と一致します。アートマン、それは馬車の主人ですが、馬車に乗り、席に座っています。これはキリスト教の聖霊にあたると言えます。または、バハイ信教の精神の世界にあたります。あるいは仏教の真理、タハガタです。このヒンズー教の馬車の比喩は、特にバハイの魂の旅の比喩に一致します。馬車の主人、それはアートマンですが、理性である御者に方向を指示します。アートマンは人間の理性のガイドです。ちょうどそれはキリスト教での個人の魂のガイドを務める聖霊のようなものです。もちろんもっと多くの類似したものが見られるでしょう。しかしここに引用したいくつかの例は、二元論は一元論の基礎の上に築かれていることを示しています。この人間の特質にたいする考え方はバハイの教典の中ではっきりと表現されていますし、他の多くの宗教の教典の中にもそれとなく示されています。将来それは西と東の精神的な伝統が一体となる原則となるかもしれません。